

皆様と  
病院を結ぶ  
情報誌

# すまいるみと

## 一言 医療



### それってケロイド?

形成外科長 伊藤 正洋

形成外科の外来診療をしていると、「私ってケロイド体質なんですか」「ケロイドがあつて」といった訴えに遭遇します。では、ケロイドって何でしょう?人の皮膚は一定の深さ以上(真皮以上)の傷がつくと必ず癒痕(傷痕)を形成します。この癒痕も時間とともに変化し、数ヶ月から1年程度で白っぽくなります。これを成熟癒痕といふ正常な傷の経過の最終段階です。この経過が順調に行かず、傷痕が盛り上がり、痒みや痛みを伴う状態があります。これには、ケロイドと肥厚性癒痕と言われる状態が含まれます。一見するとこの二つの状態は区別しにくいのですが、その経過から、拡大傾向がなく自然に改善していくものを肥厚性癒痕といいますが、それに対しケロイドは、本来の傷痕の範囲を越え大きくなっていきます。実際のところケロイド

ドと言う訴えの多くは肥厚性癒痕であり本来のケロイドは少ないようです。ケロイドの原因は、ケガ・手術の傷・虫刺され・ニキビ・ピアスなど様々です。傷ついた記憶のない場合でも、微細な傷がきっかけになっていると考えられています。また、その発生には人種的な傾向(有色人種に多い)や体質(検査では予測し得ない)、部位に特徴があります。発生しやすい部位としては、胸・肩から上腕・下腹部などがあります。

治療には、決定的なものがなく難渋することも多くあり、根気強く行う必要があります。大きく分けて、外科的(手術)治療と保存的治療に分かれます。ケロイドに対する手術は、安易に行われるべきではなく、悪化の危険をはらんでいますが、放射線による治療を併用して良好な結果が得られることもあります。薬物による治療には、内服薬・外用薬(塗り薬・貼り薬)・注射などの手段があります。またスポンジで圧迫するなど薬を使用しない治療もあります。これらの治療は、単独で行うことも、あるいは複数の方法を組み合わせることもあります。盛り上がった傷痕や痒みのある傷痕は、それだけで気になるものです。ケロイドは放置することにより悪化・拡大する病気ですので、一度相談してみることをお勧めします。

平成16年9月16日恒例となった院内勉強会(9回目)が開催され、ご紹介いただいている症例を中心に盛会裏に終わりました。今回の当番幹事は私と病理八重樫先生、青木先生の御指導の基に午後5時30分より開始し、午後7時まで大いに消化器症例について勉強しました。今回症例をご紹介いただいたたご開業医の先生方も多数参加していただいたほか、コメディカルの職員の参加も多数ありました。本勉強会は幹事として病院長の私と津久井、松本両副院長が順番に病理のスタッフと行うもので、病院職員の病



肥厚性癒痕



ケロイド

## 論壇



### 臨床検査技師としての心構え

臨床検査技師部長 森田 幸二

三年あるいは四年間の技師学校での教育では、臨床検査の輪郭は理解できたとしても、技術者そのものの本質的なあり方についてはよくわかっていないことが多いように思われます。事実、学校教育が各種学校であるという不満やコンプレックスが先に立ち自らの職業を謙遜する傾向も少なくはないようです。例えば尿の検査と

か、便の検査と聞いただけで下等な仕事のように一般の人は考えがちです。臨床検査がいかに重要な業務を司っているか、技術者としてのプライドと高邁なる技術者倫理を持つて当たらなければならないことが前提にあります。医療としては、人間の生命を守ることを第一の目的として、医師・看護師をはじめ

多くの医療従事者はその目的に向かって努力を続けている。われわれ臨床検査技師はこの医療の中で患者の病気の診断について臨床医に的確な情報を提供することが使命であります。データが不正確であれば、患者様の診断を誤り最適な治療も施せません。臨床検査の生命は何と言っても検査データの正確度すなわち精度といっても過言ではありません。不正確なデータなら検査を施行しない方がましです。

精度を良くするためにはどうすればよいかそれには色々な条件があります。①材料は正しく採取され、間違えない輸送方法で運ばれてきたか。②提出されてからの保存法に誤りはないか。③検査方法は、現行のものの中で信頼にた

## 第6回市民セミナー開催される



第6回市民セミナーが水戸市梅香のJA会館にて開催されました。今回は当院整形外科科長の平野篤先生により、『成長期におけるスポーツ障害とその予防』と題し、講演が行われました。平野先生は元ヴェルディ川崎のチームドクターを務めており、当院に於いてもスポーツ外来を開設しております。

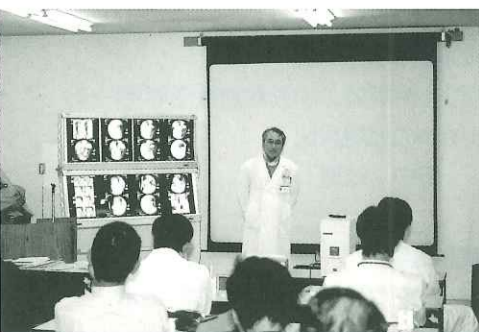
来場者は県内より学校関係者、スポーツ少年団の指導者をはじめ現役の運動部員などが多数来場し、盛況のうちに終わりました。



## 第6回 消化器病勉強会について

平成16年9月16日恒例となった院内勉強会(9回目)が開催され、ご紹介いただいている症例を中心に盛会裏に終わりました。今回の当番幹事は私と病理八重樫先生、青木先生の御指導の基に午後5時30分より開始し、午後7時まで大いに消化器症例について勉強しました。今回症例をご紹介いただいたたご開業医の先生方も多数参加していただいたほか、コメディカルの職員の参加も多数ありました。本勉強会は幹事として病院長の私と津久井、松本両副院長が順番に病理のスタッフと行うもので、病院職員の病

気の中で一番多い消化器疾患に対する理解を深めると共に、病診連携の充実を目的に開催されるようになったもので、今後は当院への研修医の勉強会のひとつとしても他の色々な勉強会・セミナーと共に益々充実されることを願って止みません。(川崎記)



るものか。④測定手技は正しいか。⑤標準血清などでデータの精度についてチェックしたか。⑥測定前に機械のメンテナンスなどを行ったかなど十分確認し、データの精度を第一とする検査を行うことが大事です。特に、臨床検査は範囲も広いので、総てにおいて万能とは行きませんが、最初に浅くても広く知識を吸収し、しかるのち自分が好み与えられた専門技術を身につけるよう自己研鑽にも心がける必要があります。そして自分の担当する専門分野においては、深く勉強を積み、研究に励み何でも出来るというプロ意識を持って検査に当たらなければなりません。

# 日本農村医学会に参加して

臨床工学部 照沼 雄介

まず今回私達が発表することになった題材、白血球系細胞除去療法について説明します。名称の通り、血液成分の中の白血球を除去する治療法です。でも白血球は体の免疫作用の重要な役割をしているのに、なぜ除去してしまうのか？私もこの発表をするまでは、なぜそんなことをするのか想像が付きませんでした。

この治療法を説明する際、どのような病気にかかった患者様が適応になるのかを説明したいと思います。まず白血球とは私たちが病気になるように守ってくれているものです。白血球は病原体がはいつてくる所に集中して、病原体を食べて抑制してくれています。これは自分の体と違う物体を拒否する反応の一つです（免疫）、しかしある特定の病気になってしまうとその抑制しようとする白血球が増殖しすぎて、逆に正常な細胞に悪さをしてしまうのです。そのような影響を及ぼしてしまういくつかの病気を総称して自己免疫疾患といえます。代表例として潰瘍性大腸炎、関節リウマチ、クローン病などがあげられます。これらの疾患に対して、白血球の除去ならびに炎症反応の抑制を目的としたものが今回施行した白血球除去療法のしくみです。

この自己免疫疾患に対する治療法は今まで薬物療法が第一選択とされてきました。もしも薬で治らない場合は外科的治療すなわち手術となります。多くの場合薬物療法で対処することが多いのですが、問題点として薬物の副作用があげられます。この疾患に対する薬剤の副作用として、緑内障や白内障、ムーンフェイスといって顔が月のようにまるくなってしまう状態、成長抑制、月経異常、精神障害などたくさん副作用が心配されます。

近年今回治療した患者様の原疾患の潰瘍性大腸炎は、若者や小児にも多く発症されるようになってきました。食生活の欧米化に伴うものといわれています。しかし若者においてはこれから人生において薬剤の副作用は重要な問題となってきます。これから白血球系細胞除去療法などの比較的作用が重篤ではない治療法が第一選択として必要ではないかと考えられました。

五月に赴任した当初は研修医一年目というのと環境の変化で不安で胸がいつぱいでしたが、先生方やスタッフの方々がとても優しく右も左もわからない私を温かくサポートしてくださったので、毎日楽しく働くことができました。この病院で医師としてのスタートが切れたことを幸せに思います。ここで得たものをこれからの研修に活かし、皆さんが頼れるような良い医師になれるよう頑張ります。五ヶ月間本当にありがとうございました。

水戸協同病院での研修を終えて

## 水戸協同病院での研修を終えて

臨床研修医 谷口 優子

昨年引き続き今年も2泊3日のサマーキャンプにボランティアスタッフとして参加させて頂きました。26名の1型キャンパーとOB・OG、医療スタッフ、学生ボランティア、製薬会社スタッフなど総勢81名が参加しました。

## 茨城つぼみの会小児糖尿病サマーキャンプ2004に参加して

看護師糖尿病療養指導士 鈴木さゆり

子供たちはあらゆる場面で積極的に元気でいます。しかも、血糖コントロールも忘れていないのです。今回、ボランティア活動を通して子供たちから私が患者様と関わらせて頂く上での勇気とパワーをもらった気がします。

今年も引き続き今年も2泊3日のサマーキャンプにボランティアスタッフとして参加させて頂きました。26名の1型キャンパーとOB・OG、医療スタッフ、学生ボランティア、製薬会社スタッフなど総勢81名が参加しました。

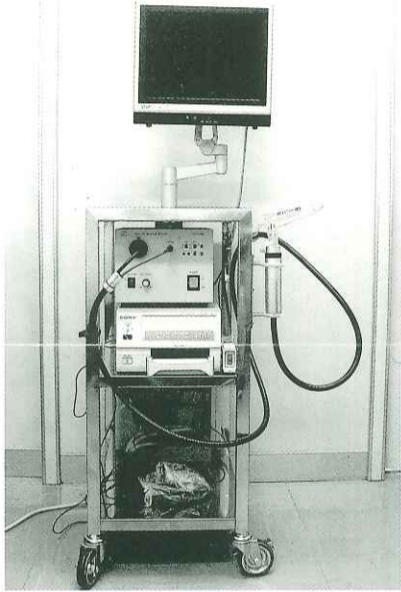
### 最新医療器械紹介

## 先進の医療を実現したコフTVモニターシステム R-TV2000Sについて

(肛門・直腸検査用TVカメラシステム)

肛門患部の鮮明な拡大画像が得られ、診療しながらの治療を可能にした革新的テレビモニターシステムです。さらにこれにより、患者様に自分では観察できずらい肛門部の病変をビジュアルで見せながら、十分な説明の基に治療を可能にしました。これにより、直腸鏡検査300点(D311)が算定可能となりました。今までの肛門疾患の診断には、内視鏡室での大腸ファイバースコープの施行が必要でありましたが、外来でのテレビモニターならびに同時に撮影されたハードコピーで、自分の肛門直腸の患部を自分で判断することも可能にしたとあって良いでしょう。

(大腸肛門センター 川崎)



### 学会発表他 (7月)

- \*大塚製薬 社内講演会
  - ・演 題：クリニカルパスの実際
  - 発表者：外科 新妻 義文
  - 発表日：6月10日
- \*第4回 いきいき子育て講座
  - ・演 題：ヒトとその子育ての自然なあり方を考える
  - 生きる力を信じて—
  - 発表者：小児科 田中 敏博
  - 発表日：6月18日
- \*鹿行潮来保育士部会
  - ・演 題：ヒトとその子育ての自然なあり方を支援する
  - 発表者：小児科 田中 敏博
  - 発表日：7月3日
- \*第40回 日本周産期新生児医学会総会
  - ・演 題：胎児感染を回避できた妊娠10週の妊婦における伝染性紅斑の一例
  - 発表者：小児科 田中 敏博
  - 発表日：7月13日
- \*オストミー講習会
  - ・演 題：ストマーケアについて
  - 発表者：外科 川崎 恒雄
  - 発表日：7月18日

### 学会発表他 (8月)

- \*茨城花田会総会
  - ・演 題：サッカーを中心としたスポーツ障害
  - 発表者：整形外科 平野 篤
  - 発表日：8月1日

- \*河内町立金江津保育所 平成16年度第3回家庭教育学級
  - ・演 題：「ヒトとその子育ての自然なあり方を考える」
  - 生きる力を信じて—
  - 発表者：小児科 田中 敏博
  - 発表日：8月6日
- \*第14回 日本外来小児科学会
  - ・演 題：茨城感染症流行情報ネットワークの活動について
  - 発表者：小児科 田中 敏博
  - 発表日：8月21日

### 論文発表 (8月)

- \*掲載誌：金原出版45巻8号
  - ・論 文：インフルエンザウイルス感染症に対するネブライザー吸入によるザナミビルの使用経験
  - 著 者：小児科 田中 敏博
  - 分 類：原著
- \*掲載誌：日本醫事新報No4190号
  - ・論 文：スポーツによる疲労骨折
  - 著 者：整形外科 平野 篤
  - 分 類：原著

### 学会発表他 (9月)

- \*第28回 茨城県救急医学会
  - ・演 題：当科における時間外の小児救急搬送専用PHSホットラインの運用状況
  - 発表者：小児科 田中 敏博
  - 発表日：9月11日
- \*第28回 茨城県救急医学会
  - ・演 題：手術患者チェックリスト一体化の有効性

—外来から病棟・手術室まで—  
発表者：看護部(4西病棟) 大谷 晴子  
発表日：9月11日

### \*第31回 日本小児臨床薬理学会

・演 題：新GCP下の治験に初めて参加して  
—小児用医薬品の治験推進のために—  
発表者：小児科 田中 敏博  
発表日：9月18日

### \*第53回 東日本整形災害外科学会

・演 題：大腿骨頭すべり症に対するピンニング後頸部成長について  
発表者：整形外科 中山 知樹  
発表日：9月25日

### 論文発表 (9月)

- \*掲載誌：形の科学百科事典
  - ・論 文：肺・気管支の形
  - 著 者：病理 八重樫 弘
  - 分 類：本
- \*掲載誌：形の科学百科事典
  - ・論 文：3次元再構成の技法
  - 著 者：病理 八重樫 弘
  - 分 類：本
- \*掲載誌：感染と抗菌薬7巻3号
  - ・論 文：実例に学ぶ非定型肺炎の診断の実際
  - 3) 小児のクラミジア肺炎
  - 著 者：小児科 田中 敏博
  - 分 類：総説